

辞書で「苦難」と引くと、「つらく困難なこと」や「苦しみ」といった意味が並び、お世辞にも良い印象を持てる言葉ではありません。

もちろん「苦難」に陥ることは、誰しも自ら望むものでなく、できるならば「苦難」と遭遇することがないようにと願うものです。もし「苦難」に陥ってしまったなら、一日も早く逃れたいと思うのが普通でしょう。しかし、少し視点を変えて、人生や仕事などにおいて苦難「あり」と「なし」の場合を比較すると、「あり」の方がその内容に、より深みが出るのではないのでしょうか。

偉人たちの人生が、すべて順風満帆であったとしたら、後世の人々が「尊敬する人物」として興味を持つことはなかったかもしれません。

例えば、戦国の乱世を平定した徳川家康にも負け戦が何度もあり、京や大阪と違い、当時は未開発だった江戸を領地とさせられ苦勞した一面があるからこそ、多くの文学作品の題材となり、偉人として語られるだけの魅力があるといえるでしょう。

エジソンの発明がはじめから成功ばかりで、松下幸之助が裕福な幼少期を過ごしていたら、同じレベルの成功を収めていても魅力に乏しく感じたかもしれません。

架空の物語であってもそれは同様で、小説や演劇、映画やアニメなども、そのストーリーに上手いかわかない場面があるからこそ、それを乗り越えて成功をつかむ過程が、面白かったり感動したりするのではないで



苦難と向き合うからこそ 見えるものがある

しようか。優れた能力を持つ主人公であっても、最初から最後まで成功する姿しかないのでは面白がありません。

このように、自分のこととなれば避けたい「苦難」も、自分を離れ、客観視すれば、深みを生み出す重要な要素になることがわかります。であるならば、自分自身に降りかかる「苦難」も、演劇や映画を見るように、一歩引いた所から冷静に客観視できれば、ただ「つらい」とか「苦しい」という捉え方だけではなくなるはずです。

直面した苦しみ慌てふためき右往左往しては、自分のすべきことが分かりません。目の前に好転の機会が訪れても気づかず、せっかくの好機を取り逃してしまふことになるでしょう。

純粋倫理を学ぶと『万人幸福の葉』の第二条「苦難は幸福の門」という言葉に出合います。これは「苦難の後には幸福が来る」といった気休めを意味するものではありません。上手いかわないことが起きるのは、必ずそうなる「原因」と「意味」があります。それを探り、真正面から向き合って「原因」を改善し「意味」を分かち行動を起こすからこそ「幸福」に至るのだと示しているのです。

一般的に「苦難」は嫌なものと思われ、避ける対象とされがちです。しかし、避けて目を逸らしては何も得ることができません。目を逸らさないからこそ、見えてくるもの、得るものがあると認識し、「苦難」に真正面から向き合いたいものです。